

# 中干し後の適切な水管理、生育診断による的確な穂肥で収量・品質を確保！

## 1. 頸城区・大潟区管内の水稻生育状況（6月18日現在）

●6月18日現在の水稻生育状況 ( )内は草丈・茎数は指標比、葉数・葉色は指標差

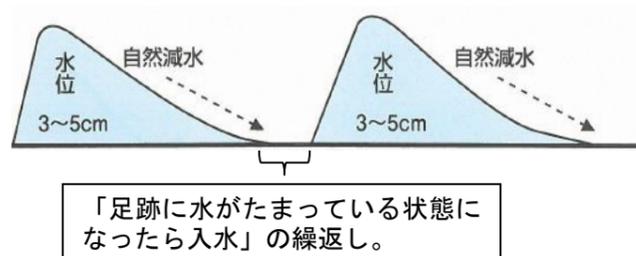
調査地点	品種	移植日	植付株数(株/坪)	草丈(cm)	茎数(本/m <sup>2</sup> )	葉数(L)	葉色
頸城区榎井	つきあかり	5月2日	57.8	50.8 (101%)	336.0 (88%)	9.2 (-0.3)	44.0 (+1.0)
大潟区潟町	こしいぶき	5月18日	66.7	30.0 (83%)	238.4 (51%)	7.7 (-1.1)	42.2 (+4.2)
頸城区島田	コシヒカリ BL	5月11日	56.4	37.7 (99%)	350.6 (82%)	8.0 (-0.8)	40.4 (+1.4)
大潟区吉崎	コシヒカリ BL	5月12日	62.3	35.2 (93%)	342.0 (80%)	8.3 (-0.5)	38.4 (-0.6)

・草丈は指標値並で茎数、葉数は少なめ、葉色は少し濃い目の生育状況です。移植後～6月初旬は気温が低く日照が少なかった為生育が緩慢でしたが、それ以降は気温も高くなってきており生育は回復傾向です。適切な中干しを実施することで生育調整を行い、しっかりと穂肥を施用できる管理をしましょう。

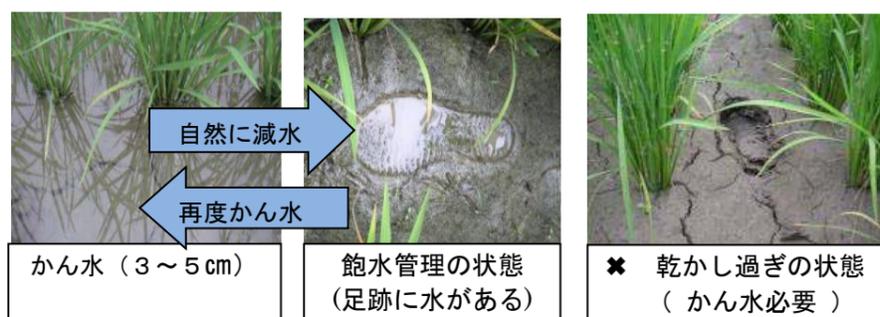
## 2. 中干し後の水管理

- 下記の出穂期予想を参考に、出穂1か月前には中干しを終了する。
- その後は、浅水の間断かん水から徐々に飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）へ移行する。

飽水管理のイメージ



【飽水管理の方法】



## 3. 出穂期予想と穂肥時期のめやす(6月13日現在)

◎出穂期は、「早生は平年より2日程度早い」、「コシヒカリは平年並み」の予想です

品種	出穂予想日	1回目穂肥		2回目穂肥		合計窒素施用量 (kg/10a)
		時期	出穂前日数	時期	出穂前日数	
新潟次郎	7/16頃	6/16～6/21頃	30～25	7/2頃	14	6
五百万石	7/19頃	6/29頃	20	7/7頃	12	1～2
つきあかり	7/19頃	6/19～6/24頃	30～25	7/5頃	14	3～3.5
わたぼうし	7/21頃	6/29～7/1頃	22～20	7/11～7/13頃	12～10	2～3
こしいぶき	7/25頃	7/2頃	23	7/11頃	14	2～3
こがねもち	7/29頃	7/11～7/24頃	18～15	7/19頃	10	1～3
コシヒカリ	8/1頃	7/14～7/17頃	18～15	7/22頃	10	1～3

○合計窒素施用量を2回に分けて施用する。施用方法は4穂肥のポイントを参照。

○出穂期はほ場間で差があり、今後の天候によっても前後します。

○つきあかりや新潟次郎で穂肥時期のめやす前に葉色が低下した場合は、早めに穂肥を施用する。

※稚苗5月10～15日頃、中苗5月15～20日頃の移植で化成肥料の使用を想定。

## 4. 穂肥のポイント ～ほ場ごとに生育診断を行いましょう！～

- ・穂肥時期の判断は、幼穂形成期(幼穂長0.1cmの時期)を確認し、遅れずに穂肥を施用しましょう。
- ・1回目穂肥は、穂数や粒数確保による収量向上、2回目穂肥は登熟向上に効果があります。施用にあたっては、倒伏や粒数過剰を防ぎ、後期栄養を確保するため、必ずほ場ごとに生育診断を行いましょう。

(1) 資材毎の窒素成分1kgになる使用量のめやす

肥料名	保証成分(N:P:K)	窒素成分1kgとなる使用量	備考
越後の輝き有機50穂肥(有機入り)	12 : 2 : 8	8.3 kg	有機態窒素が約53%配合されている為、通常の穂肥時期よりも4～5日早めの施用が必要
えちご上越専用穂肥チャレンジャー	15 : 4 : 15	6.7 kg	窒素・加里成分を強めた無機の穂肥
硫安	21 : 0 : 0	4.8 kg	速効性の窒素単肥
尿素	46 : 0 : 0	2.2 kg	速効性の窒素単肥

(2) 穂肥施用量のめやす ～ 1回目穂肥は、各品種の適期に遅れずに施用する。2回目穂肥は、1回目穂肥の概ね10日後に施用する～

品種名	合計施用量 (Nkg/10a)	留意点
新潟次郎	6	1回目穂肥は遅れないよう注意する。1回目の穂肥施用量は3kg/10a。合計6kgをめやすとする。
五百万石	1～2	穂肥は1回目に重点を置く。出穂期25日後まで飽水管理とし、早期落水はしない。
つきあかり	3～3.5	出穂期頃まで葉色 (SPAD 値) 40 以上を保つ。出穂期 25 日後まで飽水管理とし、早期落水はしない。
わたぼうし	2～3	1回目穂肥は出穂期 22～23 日前、2回目は出穂期 12～10 日前に施用する。出穂期 25 日後まで飽水管理とし、早期落水はしない。
こしいぶき	1～3	1回目穂肥は幼穂形成期に施用。低地力ほ場や後期栄養不足が懸念される場合は、1回当たりの窒素成分量を 1.5kg/10a とする。
こがねもち	1～3	生育過剰の場合は遅めの1回目施用とし、1～1.5kg/10a にとどめる。
コシヒカリ BL	1～3	1回目の穂肥は生育診断により施用時期・施用量を判断する。2回目の穂肥は後期栄養持続の為に確実に施用する。

(3) コシヒカリの穂肥診断 ～下記の調査結果を基に、穂肥時期及び量を判断する～

【1回目の穂肥時期及び施用量:幼穂形成期(出穂 24 日前頃)の生育による診断】

草丈	葉色(単葉)	SPAD 値 34～32 葉色板 4.2～3.9	SPAD 値 35 以上 葉色板 4.4 以上
	70～75cm 以内	時期・量とも基準どおり施用 →出穂 18 日前:1.0kg/10a	時期を遅らせて施用 →出穂 15 日前:1.0kg/10a
75～80cm 以内	施用量を減らす →出穂 18 日前:0.5～0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂 15 日前:0.5～0.8kg/10a	
80cm 以上	施用できない	施用できない	

【2回目の穂肥時期及び施用量:出穂 12 日前頃の診断】

出穂 14～12 日前の葉色(単葉)	出穂 10 日前の穂肥量(10a 当たり)
SPAD 値 32～34 葉色板 4.2～4.5	基準量どおり施用 1.0～1.5kg
SPAD 値 35 以上 葉色板 4.6 以上	施用量を減らす 0.7～1.0kg 未満

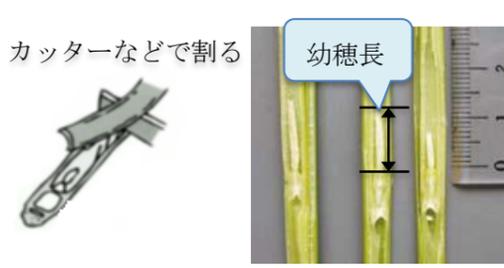
(4) 全量基肥肥料(一発元肥)の場合

全量基肥肥料(一発元肥)体系の場合、分施肥体系の穂肥散布時期に飽水管理を徹底し、土壌中の水分を保持しましょう。

全量基肥肥料であっても、葉色低下が見られる場合は施用する。

(5) 穂肥施用時期の確認方法

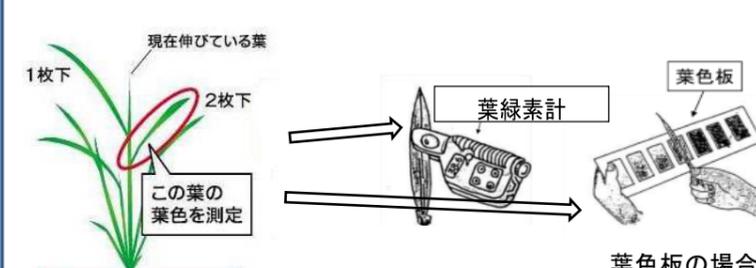
①【幼穂長の測定による診断】



幼穂長

幼穂長(cm)	出穂前日数
0.02	30 日
0.1	24 日
0.2	20 日
0.5～1.0	18 日
4.0～6.0	12 日
10.0～12.0	10 日

②【葉色(単葉)を測る】



現在伸びている葉  
1枚下 2枚下  
この葉の葉色を測定  
葉緑素計  
葉色板  
葉色板の場合

5. 病害虫対策

(1) 斑点米カメムシ類

○予察調査の結果、今年もカメムシ類の発生が確認されており、斑点米の発生が懸念される。

○畦畔・農道のイネ科雑草や水田内のヒエやホタルイはカメムシ類の生息・増殖場所となるため除草を徹底する。

農薬名	成分数	規格	対象害虫	使用量・処理方法
スタークル粒剤	1	3 kg	カメムシ類	3 kg/10a 出穂期～7 日後 ごく浅水で散布
スタークル豆つぶ	1	250g	カメムシ類	250g/10a 出穂～7 日後 湛水散布
キラップ粒剤	1	3 kg	カメムシ類	3 kg/10a 出穂 10 日前～出穂期まで ごく浅水で散布

(2) いもち病

○葉いもちは早期発見・早期防除に努める。

○わたぼうしはほ場抵抗性が弱いいため穂いもち防除を実施する。

農薬名	成分数	規格	対象病害	使用量・処理方法
オリゼメート粒剤	1	3 kg	いもち病	3～4 kg/10a 収穫 14 日前まで 葉いもち病予防 湛水散布
フジワン粒剤	1	3 kg	いもち病	3～5 kg/10a 収穫 30 日前まで 穂いもち病予防、出穂 20 日前 湛水散布
ブラシン粉剤DL	2	3 kg	いもち病・変色米	3～4 kg/10a 発生初期 収穫 7 日前まで 散布

(3) 紋枯病

○出穂後に高温に遭いやすい早生品種や、株間の風通しが悪い圃場などに発生しやすいので注意する。

○前年に紋枯病が多発したほ場では、翌年の伝染源となる菌核が多く、今年も多発するおそれがあるため、予防剤の散布等、薬剤防除を適切に行う。

農薬名	成分数	規格	対象病害	使用量・処理方法
リンバー粒剤	1	3 kg	紋枯病	3 kg/10a 収穫 30 前まで 速効性、予防・治癒効果 残効性も有する 湛水散布
バリダシン粉剤DL	0	3 kg	紋枯病	3～4 kg/10a 1 回目:10 日前～出穂期直前、2 回目:穂揃期頃 散布

